

自然を語る会

12月16日(土) 10:00-12:00 東京ボランティア・市民活動センター

参加者: 12名

担当: 鈴木善次さん

今回は、鈴木さんに、ブルックス著「レイチェル・カーソン」第17章の概要と重要な点を解説頂いた。この章では、「専門家を結集して」という副題のとおり、カーソンが『沈黙の春』を執筆するにあたって、いかに広範な分野で活躍している多数の専門家たちと個人的な文通をすることにより、当時最新の科学的な情報や知識を収集していったか。また、そうした数多くの人々が、農薬の危険性を訴えようという共通の目的に向かって、互いに協力したとき、出来上がった作品の内容が質的に高いものになったというブルックスの評価がよく分かった。『われらをめぐる海』の執筆のときも、世界中の専門家の支援を得て、当時の最新の科学的知見を反映したものであったが、これはカーソンの執筆スタイルの特徴ともいえよう。インターネットもEメールもなく情報の入手・伝達も今より格段に時間も手間もかかる時代に、精力的な文通を通じて農薬撒布がもたらす負の影響の科学的根拠を誠実に固めていったカーソンの姿勢に頭が下がる。また文通は、単に知識の伝達だけでなく、専門家からの温かい励ましの言葉もあったことと想像され、少しほっとする気持ちにもなる。

前々回につづき、鈴木さんから「ヒアリ問題」についての解説を頂いた。参考文献として『ヒアリの生物学』(東正剛・東典子編、海游舎、2008)の「はじめに」の部分が紹介された。豪州、中国、台湾など環太平洋諸国へのヒアリの侵入・定着が確認されている現在、「殺虫剤や農薬の大量散布で失敗したアメリカ合衆国の轍を踏んではならない」が、日本においては、「いったん定着した後の莫大な損失を思えば、まずヒアリの侵入・定着を防ごうとする努力こそ大いに価値がある」と著者は指摘する。

日本におけるヒアリ発見の状況についても、鈴木さんから解説があった。それによると、環境省資料では今年6月以降11月までにヒアリが確認されたのは24事例(11月17日現在)。また環境省・国土交通省による中国・台湾等からの定期コンテナ航路を有する68港湾における調査(今年8月以降3回)では、5つの港湾でヒアリが発見・駆除されたが、第3回調査では発見されず、やや収まる方向にあるとの印象である

ヒアリ問題に関連して、外来生物について松本さんから報告があった。ウシガエルの餌として移入されたアメリカザリガニが、増えて野生化し日本各地で生態系のバランスを崩しているといわれている。またモーリシャス島に17世紀末まで実在していたドードー(不思議な国のアリスにも登場)が人間とイヌやネコの侵入より絶滅し、これに連鎖して300年後にその島固有の樹木であるカルバリア・メジャーが絶滅の運命にあるという。外来種は在来種に影響を与え絶滅につながる可能性もある。環境、生態系を大きく変えてしまうこともある。次回1月の例会ではこの外来種の問題について話し合うことになった。

(文責: 井上正太)